

論

説

宮武 剛

を失う。避難所で不便と不安に耐える住民の苦境に胸が痛む。

石川県は県内を4圏域に分け、その「能登北部」（輪島市、珠洲市、穴水町、能登町）に甚大な被害が集中した。

日本海に突き出る半島北部に散在する2市2町では

「2035年には2・5人たいらんかいね」に1人の見通し」（石川県長寿社会プラン2021）。五百円」

独り暮らしや老夫婦ばかりが目立つ小集落へ、海辺の道も山あいの道も寸断され、救援・支援活動は難渋を極める。

しかし、この海と山がもたらす産物が「能登」の活に目を疑う。

協議会も結成されている。

北は「さつぽろ朝市」「函館朝市」、南は熊本県

「牛深まるごと朝市」、長崎県「佐世保朝市」などが参加する。1988年から全国サミットをほぼ毎年開催し、輪島は2度開催地に選ばれた。

その仲間たちが各地で率先して募金集めやボランティア派遣の活動を始めた。千葉県・勝浦市、神奈川県・三浦市や厚木市など連帯の輪は広く深い。

激震からほぼ1カ月、被害の実相が掘り起こされるにつれ、死者・不明者の多さ、家屋・施設の無残な倒壊群に衝撃を受け続けた。故郷へ戻り、実家で新年を祝っていた息子・娘、孫らが圧死した不条理に言葉

能登半島地震

鎮魂と再生への祈り

過疎と高齢化が急速に進む。この20年で総人口は約

3万人減の6万人弱、65歳以上が2人に1人を占めての魚貝、山菜、野菜、輪と客との触れ合いの場でもある。さらに介護と医療のニーズが高まる75歳以上は3・5人に1人の割合で、

力と誇りである。

「輪島の朝市」は露店200余がひしめき、獲れたての魚貝、山菜、野菜、輪と客との触れ合いの場でもある。かつては「市の風」が並ぶ。コロナ禍をくぐり抜け、ようやく観光客が戻りつつあった。

朝市は、品物売り買いするだけではない。「ばあ」と呼ばれる売り子たち

余震と厳寒に追い打ちされる被災者と被災地は、いま悲哀と被害に耐えるだけで精いっぱいではない。

災害関連死を防ぐのも急務だ。軽々に復興など語れない。しかし、各地の朝市仲間が駆け付け、いつか3度目の全国サミットが開催されることを夢見たい。



みやたけ こう NPO法人福祉フォーラム・ジャパン副会長、学校法人・社会医学技術学院顧問

隣県・富山生まれの俳人・沢木欣一は、こう詠んだ。

「旅の人 能登のこのわ 展を図り、地域の振興に寄与する」全国朝市サミット

（本紙論説委員）